

高齢犬の行動変化と飼い主の意識調査

誌名	日本獣医師会雑誌 = Journal of the Japan Veterinary Medical Association
ISSN	04466454
著者名	秋田, 恵里 内田, 佳子
発行元	日本獣医師会
巻/号	60巻12号
掲載ページ	p. 863-866
発行年月	2007年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



高 齢 犬 の 行 動 変 化 と 飼 い 主 の 意 識 調 査

秋 田 恵 里 内 田 佳 子[†]

酪農学園大学獣医学部 (〒069-8501 江別市文京台緑町582)

(2006年11月13日受付・2007年4月9日受理)

要 約

10歳以上の高齢犬72頭とその飼い主を対象に、認知障害症候群(CDS)に含まれる行動変化の発現状況と高齢犬ケアに対する飼い主の意識をアンケート調査した。行動変化は32頭(44.4%)でみられ、加齢により有意に増加、特に14歳以上で急増していた。高齢犬では、より多くの種類の行動に変化が観察された。「高齢犬との生活で困っていることは何か」という質問に対する回答は、長期間の通院や犬の行動変化が多数を占めたが、実際に困っていることに対して、約半数の飼い主が特に何もしていない現実が明らかになった。89%の飼い主がCDSに関心を持っていたが、知識を持っていたのは61%に過ぎなかった。動物病院は疾病診療と同時に、行動変化への対処法の紹介を求められており、積極的に高齢犬の管理指導や情報提供に取り組むことが必要だと思われた。

—キーワード：高齢犬，行動変化，認知障害症候群。

----- 日獣会誌 60, 863～866 (2007)

1990年代から続くペットブームの影響による飼育数の増加および飼育環境の改善、そして獣医療の進歩により日本では「ペット社会の高齢化」が進んでいる。平成17年度第12回ペットフード工業会調べによると、現在飼育されている犬のうち、いわゆるシニア犬といわれる7歳以上の割合は約40.4%、10歳以上だけでも約22.4%となっている。近年、ペットの問題行動いわゆる「しつけ問題」がメディアで取り上げられることが多いが、高齢犬の飼い主にとっては、加齢により生じる行動変化への対応が医学的疾患のケアと並び重要な課題として認識されつつある。

カナダでは犬の安楽死の理由として「老齢」が40%を占め、その意志決定誘因に高齢期の行動変化が挙げられている[1]。日本では歴史的・文化的背景の違いから、高齢期の行動変化が安楽死の理由となることはごく稀であるが、飼い主の負担が著しく増加する場合にはその問題行動は非常に深刻であると思われる。

ここ数年、高齢犬にみられる行動変化の原因として、犬の認知障害症候群(以下CDS)が雑誌などで取り上げられるのを目にする機会が増えた。CDSは加齢によって発症し、腫瘍や臓器不全といった医学的要因が関与しない進行性の認知機能の低下と定義され、学習した行動、睡眠パターン、周囲に対する反応性などに生じる種々の徴候の総称である[2, 3]。2001年、Nielsonら

[4]は見当識障害、家族との相互関係の変化、排泄問題、睡眠覚醒サイクルの変化の4徴候の有無を電話調査し、11～12歳の28%、13～14歳の45%、15～16歳の68%にひとつ以上の徴候が認められたことを報告した。当然のことながら、高齢犬が必ずしもCDSを発症するとは限らず、CDSについて検討する前に、高齢犬全般にみられる行動変化の実態や飼い主の意識を把握することが必要である。

本研究は行動変化を主訴としないで動物病院に来院した10歳以上の犬とその飼い主を対象にアンケート調査を行い、加齢に伴い生じている行動変化の現状と高齢犬ケア全般に対する飼い主の持つ情報量や意識を明らかにし、行動変化の発現率や種々の背景との関連性を分析したものである。同時に、動物病院が高齢犬とその飼い主に対してどのような役割を果たしていくべきかを考察した。

材 料 お よ び 方 法

調査対象：札幌市内の4つの動物病院に行動変化以外の疾患治療または予防注射を目的に来院した10歳以上の犬とその飼育者を対象とした。

アンケート：「高齢犬に関するアンケート」と題し、犬の品種・性・年齢・飼育場所などのプロフィール、Landsbergが記したCDSに含まれる徴候[5]から抜

[†] 連絡責任者：内田佳子(酪農学園大学獣医学部獣医学科伴侶動物医療部門)

〒069-8501 江別市文京台緑町582 ☎011-388-4762 FAX 011-388-4129 E-mail : yuchida@rakuno.ac.jp

表1 年齢と行動変化の発現状況

	10～11歳 (n=22)	12～13歳 (n=18)	14～15歳 (n=19)	16歳以上 (n=12)	合計 (n=71)
何らかの行動あり	3	6	12	11	32
排泄の失敗が多くなった	1	3	8	6	18
昼夜問わずよく吠えるようになった	1	1	5	9	16
家族とのコミュニケーションの変化	2	2	3	7	14
命令に従わなくなった	2	0	6	6	14
家の中や庭で迷う	0	2	4	4	10
睡眠サイクルの変化(昼夜逆転)	1	0	2	3	6
隅や角で動けなくなっていることがある	0	0	1	5	6

表2 行動変化がみられた犬32頭の年齢別プロフィール

	10～11歳	12～13歳	14～15歳	16歳以上	計/平均
総数	3	6	12	11	32
性					
雄	1	1	1	3	6
去勢雄	0	2	5	3	10
雌	0	1	2	1	4
避妊雌	2	2	4	4	12
体重					
<10kg	2	3	8	8	21
10～20kg	0	3	1	2	6
>20kg	1	0	3	1	5
家族の平均人数	2.67	2.17	2.58	2.45	2.47±0.92
犬の世話をする人間の平均人数	2.00	1.83	1.55	1.82	1.75±0.76
犬にかける世話の平均時間/日	4.00	1.58	4.08	6.17	4.41±6.08

表3 変化した行動数と年齢群ごとの頭数

変化した行動数	1	2	3	4	5	6	7	計
10～11歳(頭)	2	0	0	0	1	0	0	3
12～13歳(頭)	6	0	0	0	0	0	0	6
14～15歳(頭)	4	3	2	2	1	0	0	12
16歳以上(頭)	1	1	3	3	2	1	0	11
計	13	4	5	5	4	1	0	32

粹した7項目(表1)とその他の行動変化の発現状況、高齢犬との生活で困っていることやその対処法・CDSへの関心度や知識などを問う飼い主の意識調査からなるアンケートを作成し、各病院に30部ずつ配布した。留め置き調査法とし、回収BOXへの投函または動物病院スタッフへの直接手渡しにより回収した。アンケート用紙および回収BOXの設置は狂犬病予防注射接種時期を利用し、その期間は1カ月間とした。

集計および統計学的解析: 統計ソフトSPSSを利用し、「犬のプロフィール」と「CDSの徴候」の項目間における偏りについて χ^2 検定、 t 検定または一元配置分散分析を用いて統計処理した。

成 績

アンケートは72部回収された(回収率100%)。

対象犬のプロフィール: 犬種の内訳はシーザー21、雑種15、ビーグル5、ヨークシャー・テリア5、シベリアン・ハスキー4、マルチーズ4、ラブラドルレトリバー3などであった(n=72)。これらは避妊済み雌26、未避妊雌15、去勢済み雄21、未去勢雄9および不明1に区分された。年齢は10歳～18歳、平均13.59±2.16歳であった(n=71、年齢不明1例)。飼育場所は室内が68、屋外2、室内外が2であった(n=72)。現在治療中の疾患がある犬が51で、疾患の種類は心疾患、腫瘍、皮膚疾患、肝疾患、てんかんなどであった。飼い主家族の構成人数は平均2.63±0.98人で、このうち犬の世話をしているのは1.92±0.77人、世話に要している時間は3.47±4.73時間であった。

CDS徴候の行動変化の発現: 72頭中32頭(44.4%)

が、調査したCDS関連の7行動のうち少なくとも1つ以上の行動に変化を示していた。7行動いずれかの変化の発現の有無と各プロフィールとの関連を χ^2 検定、 t 検定、または一元配置分散分析したところ、年齢による有意差が認められた($t=5.037$, 自由度3.605, $P<0.001$)。年齢を10～11歳(22)、12～13歳(18)、14～15歳(19)、16歳以上(12)頭に群分けし、それぞれの年齢における行動変化の発現頭数を表1に記した。何らかの行動変化は、10～11歳で13.6%(3/22)、12～13歳で33.3%(6/18)、14～15歳で63.2%(12/19)、16歳以上で91.7%(11/12)の犬にみられた。行動変化のみられた32頭の年齢別プロフィールを表2に記した。年齢を群わけし、7行動の中で変化がみられた行動数を表3に示した。一元分散分析により年齢群による差が認められた($F=9.381$, $P<0.01$)。

その他の行動の発現: 7つの行動以外に困っている行動変化があるかという質問に対し(n=69)、59.4%(41/69)が肯定し、具体的には、呼んでも無反応56.8%(25/69)、段差でのつまずき56.8%(25/69)、頑固になった38.6%(17/69)、物にぶつかる36.4%(16/69)、散歩がうまくできない34.1%(15/69)などであった。プロフィールと行動発現との間に統計的に有意な関連はなかった。

飼い主の意識調査: 高齢犬との生活で困っていること(選択回答方式、複数回答)は、「病気治療のための長期

表4 高齢犬ケアにあたり飼い主 (n=72) が動物病院に期待する取り組み

	人数 (%)						
	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位
問題行動への対処法の紹介	11 (15.3)	10 (13.9)	9 (12.5)	7 (9.7)	0 (0)	5 (6.9)	1 (1.4)
病院での診療	19 (26.4)	5 (6.9)	4 (5.6)	7 (9.7)	2 (2.8)	7 (9.7)	2 (2.8)
勉強会・相談会	9 (12.5)	9 (12.5)	6 (8.3)	6 (8.3)	5 (6.9)	2 (2.8)	7 (9.7)
介護用品の紹介	4 (5.6)	6 (8.3)	6 (8.3)	10 (13.9)	8 (11.1)	6 (8.3)	4 (5.6)
往診	8 (11.1)	7 (9.7)	3 (4.2)	3 (4.2)	5 (6.9)	8 (11.1)	9 (12.5)
処方食・サプリメントの紹介	2 (2.8)	5 (6.9)	9 (12.5)	3 (4.2)	8 (11.1)	5 (6.9)	12 (16.7)
デイケア	7 (9.7)	3 (4.2)	3 (4.2)	3 (4.2)	6 (8.3)	11 (15.3)	11 (15.3)

通院」が30 (47.6%)と最も多く、次いで「行動の変化」25 (39.7%)、「経済的な負担」22 (34.9%)、「看護時間がない」12 (19.0%)であった (n=63)。記述回答で「困っていることはない」7、「散歩に時間がかかる」、「通院に時間がかかる」、「夜2時間ごとに起こされる」がそれぞれ1ずつあった。

高齢犬との生活で困っていることへの現在の対処方法 (選択回答方式、複数回答) は「特にしていない」35 (48.6%)、「動物病院への相談」29 (40.3%)、「介護用品の利用」12 (16.7%)、「対処法がわからない」6 (9.8%)、「ケージ利用」5 (6.9%)、「家族で工夫」4 (5.6%)であった (n=72)。記述回答では「困ることを考えるのではなく、たくさんの愛情をかけることを一番に考えている」という回答があった。

CDSに対する関心度は「非常にある」34 (47.2%)、「ある」30 (41.7%)、「あまりない」2 (2.8%)、「ない」4 (5.6%)、無回答2 (2.8%)で約90%の飼い主が関心を持っていた。CDSの知識量は「詳しく知っている」7 (9.7%)、「知っている」37 (51.4%)、「言葉を聞いたことがある程度」17 (23.6%)、「知らない」9 (12.5%)、無回答2 (2.8%)であった。

高齢犬ケアにあたり動物病院に期待する取り組みについて優先順位をつけて回答してもらった結果を表4に示した。「病院での診療」はもちろんだが「問題行動への対処法の紹介」も多くの飼い主が高い優先順位で望む事項であった。

考 察

本調査は加齢による行動変化発現の実情把握と高齢犬を飼育している飼い主の意識調査を目的としており、対象犬の医学的背景については詳細な情報を得ておらず、

行動変化のあった犬をCDSと診断しているわけではない。すなわち、44%でみられたCDS関連の行動変化はその背後に基礎となる疾患が存在しているかもしれないし、いわゆる生理的老化による身体能力の低下が原因かもしれない。いずれにせよ、これらの行動変化は獣医師にとってCDSを含む疾患の重要な手がかりであることには間違いはない。アメリカの行動治療専門医Horwitz [6] は、高齢犬にみられる問題行動は分離不安、人への攻撃行動、不適切な排泄、無駄吠え、恐怖症、夜間覚醒などで、このうち7%程度がCDSによるものと報告している。

2001年、Nielsonら [4] は、高齢になるほど見当識障害、家族との相互関係の変化、排泄問題、睡眠覚醒サイクルの変化の発現率が高くなり、変化する行動数が増えることを報告している。この点は本調査と一致していた。同様の結果は他の研究者からも報告されている [7, 8]。一方で今回の調査の個々のデータをみると、行動変化が現れ始める年齢や進行速度、行動の種類には個体差があることが示された。すなわち、行動変化の種類別の発現率をみると最も多かった「排泄の失敗」でも25.0%の発現率であったし、10歳で5つの行動変化を発現している犬も存在した。Nielsonら [4] は、CDS徴候のひとつ、見当識障害のみは去勢雄で避妊雌よりも有意に発症しやすいと報告したが、本調査ではすべての行動において雌雄差、避妊手術との関連等は認められず、年齢のみが行動変化に関連するプロフィールであった。

加齢に伴い何らかの疾患を持つ犬が増加することは当然で、本調査対象犬でも7割が何らかの疾患に罹患しており、「病気治療のための長期通院」が飼い主の一番の負担事項であった。一方で、「犬の行動の変化」に負担を感じている飼い主も多く、「問題行動への対処法の紹介」「高齢犬の健康や行動変化に関する勉強会や相談会」を動物病院に希望しており、行動の変化の改善に意欲を持ち、より詳細な情報を得たいと考える飼い主が多かった。

アメリカでペットフード会社が行った調査によれば、7歳以上の高齢犬を飼育している飼い主の75%が行動の変化に気づいていながら、実際に獣医師や動物病院に相談したのは12%に過ぎなかった [9]。しかし、行動変化は前述したようにCDSを含む医学的疾患の手がかりであり、早期の介入は犬・飼い主・獣医師にとって益をもたらす。すなわち、生理的な老化が原因の行動変化であっても、適切な介護用品の利用、ケア方法、生活環境の工夫を知ることにより飼い主の負担を減じることができるし、CDSは適切な対処を行えば改善や進行の遅延が期待できる [8, 10-12]。他の医学的疾患であれば早期治療が重要なことはいうまでもない。そのためには

飼い主が行動の変化に気づいた時点で動物病院に相談することが望ましい。高齢犬の飼い主は疾患治療のために頻繁に来院していることから、「行動変化に気づいたら早期の相談を」という趣旨のポスター掲示や高齢犬の行動変化を記したハンドアウトの作成などにより積極的に動物病院が飼い主の啓発に努めることや、高齢犬を診察する際に必ず行動変化の有無を獣医師が聞き取る姿勢を持つなど、この分野へのいっそうの動物病院側の働きかけの拡充が推奨される。

最後にアンケート調査にご協力いただいたカツラ犬猫病院、さっぽろ元町動物病院、高橋動物病院、まえたに動物病院の関係各位と飼い主の方々に感謝する。

引用文献

- [1] Gorodetsky E : Epidemiology of dog and euthanasia across Canadian prairie province, *Can Vet J*, 38, 649-652 (1997)
- [2] Frank D : Cognitive Dysfunction in Dogs, *Prakt Arzt*, 84, 22-25 (2003)
- [3] Ruehul WW, Hart BL : Canine cognitive dysfunction, *Pharmacology of Animal Behavior disorders*, Dodman NH et al eds, 288-304 Blackwell Science, Boston (1998)
- [4] Neilson JC, Hart BL, Cliff KD, Ruehul WW : Prevalence of behavioral changes associated with age-related cognitive impairment in dogs, *J Am Vet Med Assoc*, 218, 1787-1791 (2001)
- [5] Landsberg G : 認知障害症候群, 小動物臨床のための5分間コンサルタント, 阿久沢正夫他訳, Tilley L and Smith FWK eds, 第3版, 1442-1443, Interzoo, Tokyo (2006)
- [6] Horwitz D : Dealing with common behavior problems in senior dogs, *Vet Med*, 96, 869-879 (2001)
- [7] Melissa JB, Benjamin LH, Kelly DC, William WR : Predicting behavioral changes associated with age-related cognitive impairment in dogs, *J Am Vet Med Assoc*, 218, 1792-1795 (2001)
- [8] Norton WM : Effect of an antioxidant-diet and Cognitive Enrichment on Age-dependent Cognitive Dysfunction in Dogs, *Prakt Tierarzt*, 84, 32-37 (2003)
- [9] Hill's Nutrition, Inc : Omnibus study on aging pets. US marketing research summary (2000)
- [10] Cotman CW, Head E, Muggenburg BA, Zicker S, Milgram NW : Brain aging in the canine : a diet enriched in antioxidants reduces cognitive dysfunction, *Neurobiol Aging*, 23, 809-818 (2002)
- [11] Dennis EJ : Effects of an Investigational Food on Age-related Behavioural Changes in Dogs, *Prakt Arzt*, 84, 38-41 (2003)
- [12] 内野富弥 : 犬の痴呆への応用, *獣医畜産新報*, 55, 65-69 (2002)

Questionnaire on Behavioral Changes in Aged Dogs and Their Owner's Concerns

Eri AKITA* and Yoshiko UCHIDA†

* *Rakuno Gakuen University, 582 Bunkyo-dai Midorimachi, Ebetsu, 069-8501, Japan*

SUMMARY

The prevalence of age-related behavioral changes in dogs and the concerns of owners were surveyed using a questionnaire. Seventy-two dogs older than ten years were included in this study. Thirty-two dogs (44.4%) were found to have shown some behavioral changes which were present in canine cognitive dysfunction cases. The prevalence of age-related behavioral changes was significant, and increased remarkably at 14 years. Older dogs were found to have shown a range of behavioral changes. There were no significant effects of other profiles on behavioral changes. Many owners complained about the frequent need to attend animal hospitals and about the behavioral changes of aged dogs. But half of all owners failed to address the problems at all. Although canine cognitive dysfunction syndrome concerned most owners of aged dogs, they lack sufficient information or knowledge about it. Owners relied on animal hospitals not only for treatments for diseases but also for management or consultations on behavioral changes. These results suggest that veterinary clinics should more actively encourage owners to provide care for their aged dogs.

— Key words : aged dogs, behavioral changes, canine cognitive dysfunction syndrome.

† Correspondence to : Yoshiko UCHIDA (Department of Small Animal Clinical Science School of Veterinary Medicine Rakuno Gakuen University)

582 Bunkyo-dai Midorimachi, Ebetsu, 069-8501, Japan

TEL 011-388-4762 FAX 011-388-4129 E-mail : yuchida@rakuno.ac.jp

— *J. Jpn. Vet. Med. Assoc.*, 60, 863 ~ 866 (2007)